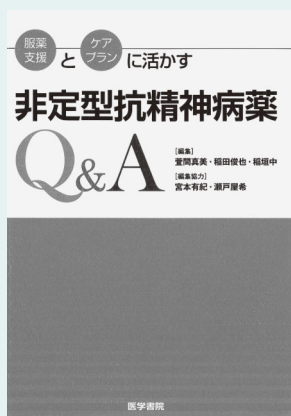


萱間真美、稲田俊也、稲垣中＝編

『服薬支援と ケアプランに活かす 非定型抗精神病薬Q&A』

2012年11月発行
定価3,150円(税込)
[ISBN978-4-260-01566-0]医学書院



医師と看護師が共同執筆という ユニークな薬の本

わが国の精神科病院入院患者の大部分を占める統合失調症圏の治療に、最初の「定型」抗精神病薬が導入されたのは1955年頃である。これらの定型抗精神病薬は精神症状の改善や再発の防止には著しい効果を示し、精神科医療に画期的な改革をもたらしたが、錐体外路性や自律神経性の副作用が高率に出現し、医師や看護師は、副作用に対応しながら、いかに薬を続けるかに苦心したものであった。

1990年代から2000年代にかけて、リスペリドンなどの「非定型」抗精神病薬が用いられるようになった。非定型抗精神病薬は、従来の定型抗精神病薬に比べて副作用が少なくなったが、その一方で、体重増加や代謝異常の出現などの新しい副作用が起こることが知られてきた。

精神疾患の治療には、服薬を続けながら、生活療法や社会復帰支援を加えた、医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなどの多職種チームによる包括的援助が必要であり、そのためには治療に関与する多くの人たちが、薬の効果や副作用をよく知って、適切に対処することが求められる。

本書は、厚生労働省の補助による地域医療基盤開発推進研究事業で「精神疾患を有する人の地域生活を支えるエビデンスに基づいた看護ガイドライン」の作成に関与した、精神医学・看護学領域の第一線で活躍し

ている臨床家により執筆された。わが国で用いられている、リスペリドン、オランザピン、クエチアピン、フルカナマール、アリピプラゾール、ペロスピロン塩酸塩水和物、ブロナンセリン、クロザピン、パリペリドンなどの非定型抗精神病薬について、それぞれの剤形、効果や副作用の特徴について詳細に解説し、さらにQ&A方式によるわかりやすい説明を加えたものである。

最初に、統合失調症の薬物治療の基礎知識を述べた序章があり、「Part1 非定型抗精神病薬はどんな薬?」「Part2 各非定型抗精神病薬の効果と副作用の特徴」「Part3 薬が効かないときに考えること」「Part4 患者の生命およびQOLに影響する副作用のモニタリング」「Part5 患者が薬を飲み続けられるための援助」などの章が続き、最後に、看護師が薬物療法にかかわる意義が述べられている。

本書は、通読すれば、現在用いられている非定型抗精神病薬をよく知ることができ、また、ナースステーションなどに置いて、診療に疑問が起こったときにも、手軽に参照することができる。

治療の現場に毎日携わっている医師と看護師との共同執筆という点でもユニークで、広く精神科の医療の実践に役立つ良書として、多くの方に読まれることが望まれる本である。

